
罪の子ルル

天風 月歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪の子ルル

【Nコード】

N3075J

【作者名】

天風 月歌

【あらすじ】

ルル・オルゴリアは文化都市で生まれた、オルゴリア家の「罪の子」。金の髪に真っ赤な目の彼女は、住んでいる地域ではひときわ可愛がられていた。しかし、子どもたちの間では浮いている存在でもあった。

そんなある日、ルルは親切心から傷ついた人を助ける。助けたことによって、ルルは「世界戦争」へと引きずり込まれてしまう。

ルルは「世界戦争」を止めるため、行動を起こす。

【プロローグ はじまり】（前書き）

少し残酷な描写があります。

苦手な方は、戻っていただきますようお願い申し上げます。

【プロローグ はじまり】

【プロローグ】

「どういうことだ、これは」

机の上には薄っぺらい紙が一枚差し出されていた。読み終わった後には、もう言葉もなかった。これはもう止まらない。止められない。自分の非力さを、無情にも見せ付けられた屈辱はプライドをも粉々に粉碎した。頭をあげることも、睨みつける余裕もない。ただ、体中から脂汗がとめどなく流れ落ちていくだけだ。

「あなたの行いの結果だ」

冷たい声は神になったつもりか。いや、恐ろしいほどの怒りの感情なのだろう。わかつているだけ、何も言えない。部屋がいつもよりも広く、自分を押しつぶそうとしているような圧迫感を感じる。暗い部屋には二人しかいないというのに。椅子がぎり、と嫌な音を立てて軋んだ。

「私はどうしたらいいんだ」

「自分の保身が一番ですか」

ぴしゃりと返しが返ってきて、息が漏れた。そのようなつもりで言ったわけではないのに、保身のための一言だと捉えられたのか。しかし、弁解する気力もない。

「あなたが引き起こしたことだ。本来ならば、あなた自身を以って償うのが妥当だろう」

それは死を選べ、ということか。暗黙の空気は、否定する雰囲気ではなかった。かちやり、と甲高い音が机の上に乗る。

小さな刀剣だった。

「命を絶て・・・と」

自嘲気味な笑いを抑えることはできなかった。壊れたようにひと

しきり笑つと、涙が溢れた。刀剣が歪む。目の前の光景も、何もかも。全て涙に封じて、地面に落として、靴で踏みにじれてしまえばいいのに。

目の前の人物は冷たい視線だけを投げかけると、背中を見せて去っていく。ただ一人、暗い部屋の中に取り残され、理性がどこかでぶつん、と切れ始めた。

【1、スノリアにて】（前書き）

人の罪を購えよ。ひとかけらの親切心、愛をもって。

【1、スノリアにて】

気が遠くなるほどに昔の話。空と大地はそれぞれの国を持ち、お互いに行き交っていた時代。人々は色を持ち、家を持ち、誇りを持っていた。誰もが争わず、穏やかであった。それは、空の国のある都市でも同じことである。

文化都市、というが、その規模は大きい。世界のはじまりから今までの文化を空の中に取り込んでいる。文化一つ一つは、地にあればそのまま消えていきかねないものでも、保存しておくことができた。一番に、風雨で風化することがない。空の国は雲の上にあるから、いつだって晴れている。

しかし、それはルルにとっては不思議なものであった。

「うーん」

一人の少女が、家の中から空を見上げて、腕を組んだまま呻っていた。金の髪はゆるやかなウェーブは肩を覆っており、一見すると、大人しそうに見える。しかし、好奇心に満ち満ちた真紅の瞳がそのイメージを打ち消している。

ルル・オルゴリアはひたすらに空を見つめては、うんうん呻っている。富裕層に属すオルゴリア家の一人娘である。オルゴリア家は賢い一門であると有名であったが、ルルは変わり者として有名であった。

「ルル」

「あ、お母さん」

ルルがマーシェに向かって、太陽のような笑顔を向けて近づいている。マーシェは幼い娘の身体をふくよかな体で受け止めると、

「何してるの」

と、優しい声で聞いた。

「あのね」

母の身体に腕をまわした状態で、ルルは矢継ぎ早に言った。

「あのね、どうして空の国はいつも晴れているのかをずっと考えていたの。大地の国にはあつて、空の国には「あめ」がないって聞いて」

マーシェはルルの好奇心に驚いたが、ルルの頭を優しく撫ぜると、ルルの目よりも少し明るい色の瞳で見つめた。

「ルルはおもしろいわね。ああ、そうだ。カレンちゃんが遊びにきたわよ。遊びにいつてらっしゃい」

「カレンちゃん!!」

ルルはぱあ、っと表情を明るくして、玄関まで走り抜ける。マーシェが「廊下を走るな」と注意する前に、ルルの姿は見えなくなっていた。

ルルが玄関を開けた先には、やわらかいブラウンの髪を真ん中からわけて、ふたつに結んでいたカレンがいた。手にはボールを持っていた。

「ルルちゃん、あーそーぼ」

「うんっ、あそぼ」

ルルとカレンが雲の門扉を通り抜けて外に出た。ここから、雪色公園《スノリア》まで、こどもの足で20分。商店街を抜けた先に、その公園はある。スノリアには遊具が一切ない。遊ぶためには、子どもたちが遊ぶものを持参せねばならず、「持ってきたものは持ち帰る」ということを身につけさせるためにはいいものである。

「あら、ルルちゃん。カレンちゃん」

商店街を通ると、必ずルルは声をかけられる。

「こんにちわー」

挨拶をしているものの、たまに商店街の人ではない人からも挨拶されることがある。しかし、それがどうしてかはルルは知らない。

「ルル、今から遊びに行くのかい？」

空の魚を売っているおじさんが聞いてきた。

「うん。カレンちゃんね」

カレンは恥ずかしそうに、ルルの後に隠れる。

「ほう、そうかい。お友達も一緒なら、これを持っていきな。腹の足しになるぜ」

おじさんは袋いっぱいにつまった、空の煮干をくれた。

「ありがとう」

「いんや、ルルは可愛いからな。特別だ」

おじさんも照れたように笑う。ルルは魚のおじさんを背にして、スノリアまで走る。スノリアはがらんとしており、ルルたちだけのようであった。一面白く、ところどころに青みがかかっている。

「カレンちゃん、あそこであそぼ」

ルルが青みがかかっているところを指差して、走り出そうとしたときだった。

がつん！！

ルルの視界がぐらつき、息が一瞬できなかった。

「・・・つつ・・・」

「ルルちゃん！！」

カレンがボールを持ったまま、走り寄ってきた。ルルは身体を起こそうと思ったが、体が重い。顔に何かが流れるのを感じて、手で流れるものに触れた。

真っ赤な血だった。

「きやあああああああ！！！！！」

悲鳴が喉をほとばしる。

「ルルちゃん！！！！ 大丈夫！？」

カレンが可哀想なくらいにおどおどして、きよろきよろと周りを見渡す。と、ルルの近くに血のついた石があった。

「そこは俺たちの場所だ！！！」

カレンが振り向いた先に、少年が二人いた。

「トニア！！ ベル！！！」

トニアは手に石をいくつか持っており、ベルはそんなトニアの袖を引っ張って蒼くなっている。さっきルルを怪我させたのはトニアのようである。

「てめーが来るとこじゃねえんだよ、罪の子！！！」

ルルはぱたと落ちる血と痛みで放心状態だ。カレンも足が震えている。

「そこからのけ。のかないと、また石を投げつけんぞ、おらあ」

「ちょ、トニア、やりすぎじゃね」

ベルがトニアより三步下がった位置で、トニアの長袖の袖をくいくいと引っ張る。トニアはベルの手をつるさそうに払いのけると、再び石をつかんだ。

「やめてよ！！！」

カレンが金切り声で、トニアに叫ぶが、トニアには聞こえていないようだった。

「い・・・たい」

「ルルちゃん」

「カレンちゃん・・・」

そのときだった。

「こらあ！！ お前ら、何しとるかあああああ」

スノリアに怒号が響く。

カレンが涙と鼻水でぐちよぐちよになった顔をあげると、そこにいたのは空の国とは違う人種の人が走ってきた。そして、ルルを見ると、間髪入れずにトニアを殴りつけた。トニアは吹っ飛び、ベルも一緒に吹き飛ばされた。

「おい、大丈夫か！？ しっかりしろ！！」

空よりも青い瞳で、ルルを見つめる顔はうすぼんやりとしか見えない。ルルは気を失った。

オルゴリア家にて

目を開けると、真っ白とほのかにオレンジめいた光が目射した。視野は狭く、その明るさに目が眩む。ルルの鼻腔には、かすかな消毒液の匂いと、普段の自分の部屋特有の匂いが届いていた。そつと左手で、左目を触る。そこには硬い布の手触りがあつた。どうやら包帯を巻かれているらしい。記憶をたどる。どうして、私はここにいるんだろう。どうして、私は目を怪我しているんだろう。

「ルルちゃん！！ おばさま、ルルちゃんが目を開けた！！」

可愛らしいブラウンの髪が見えた。どうやら、カレンが近くにいろようだ。ルルは身体に力をいれて起き上がろうとした。

「いたっ！！」

ずきん、と目が痛んだ。身体を起こそうにも起こせそうにない。

「ルル、無理してはだめよ。あなたは目を怪我しているんだから」
マーシェが落ち着いた声で、ルルの隣にすっと座る。マーシェは一緒に持ってきた盆に冷たい水と痛み止めの薬を載せてきていたようだ。水をコップに注ぎこむと、薬を二錠、ルルの口に落とし込んだ。冷たい水がつう・・・と喉を滑り落ちていく感覚を通して、ルルはやつと意識がはつきりしてきたように感じた。

「私・・・トニアに・・・」

「トニアって、お前に石を投げつけたあいつか」

ルルのか細い声に乗せるようにして、ドアが静かな音を立てて開いた。ルルは首だけを右に傾けると、背の高い男性が入ってきた。銀色の髪をした、青い瞳が特徴的だった。青い瞳はまるで、空も海

も一緒に溶かしたような青色だ。一度視線を合わせたら、二度と外したくなるような、魅力的な光が青の中を揺らめいていた。

「うん。でも、ベルは投げていなかった」

男性の言葉に、カレンが答えた。男性はカレンの頭をぽんぽんとすると、カレンは恥ずかしそうに嬉しそうに顔を赤らめた。座っていたマーシェが音もなく椅子から立ち上がると、ルルにも聞いた。しかし、ルルはマーシェに聞かれても、わからなかった。ルルは石を投げられたことまでは覚えていても、誰が投げたのかまでは確認できていなかった。それよりも自分の目から大量の出血があったことに関心がいったままで、そのあとのことはうる覚えなのだ。ルルが覚えていたことはただひとつ。

「真つ青な瞳・・・」

「真つ青な瞳？」

ルルははつとした。もしかして、今日の前にいるのは・・・

「俺か？」

男性が自身を指差すので、ルルはこくりと頷いた。マーシェは男性を見ると、合点がいったようである。

「多分、この子が意識を失う前に、助けに来てくださったあなたの瞳がとても印象的だったんでしょね。空の国で青い瞳はとても珍しいですから」

「俺には真紅の瞳のほうが珍しい。本当に空の国には様々な色があるんだな」

男性はドアから離れると、ルルのベッド近くに移動して、ルルの瞳を覗き込んだ。

「紹介が遅れたな。俺はレテア・イン。大地の国のものだ」

「だいちのくに？」

ルルが言葉を繰り返したそのときだった。

「オルゴリアさん！！　ルルちゃん！！」

門扉のベルをけたたましく鳴らす音と、悲痛に満ちた声に、ルルの部屋にいた人たちがルルの左側の窓の外を見下ろした。外には血相を変えた中年女性と、幾分背が低い子どもがいるようである。ルルはその声に聞き覚えがあった。マーシェは相手が誰かわかったらしく、椅子から立ち上がると、音もなく階下に向かう。ややあつて門扉がマーシェの手によって開けられると、女性と子どもは憔悴しきった様子で家の中に入ってきたようだ。「本当に悪かった」などの声が聞こえる辺りで、大体誰が来たのかわかるというものである。

「誰か来たのか」

レテアの声に、カレンが「トニアのおばさま」と小さく呟いた。

「ほう、まあそりやそうだな。女の子の顔に石を投げつけたんだし、謝りにきたってのも頷ける」

レテアが一人で頷いていると、ルルが話題をさつと変えた。

「ねえ、おじさんは何をしている人なの」

おじさん、の一言にレテアはずるつとこける。

「おじさんじゃなくて、レテア。俺は大地の国で行商をしてる。」

今回は空の国に行商することになったから来てみたんだ。そしたら、真っ白な広場で女の子が二人いるのに、一人はうずくまってるし、入り口付近には石を持ったやつがいたしで、慌てて行ってみたら、お嬢ちゃんが血を流してたってわけだ。それにしても、カレンがいたおかげで助かった」

急に話を振られて、カレンがはっとした顔をした。

「そつか。レテアは行商人だったのね。私、ルル。ルル・オルゴリア。ねえ、大地の国ってどんなところなの？」

にこつと笑顔を浮かべて、レテアは話始めようとしたときだった。

「やめてください！！　こんなことをしてもらっても困ります！！」

マーシェの声に、レテアが振り向いた。階下から、まだ声が聞こえる。押し問答を繰り返しているようである。カレンはいち早く、ドアを抜けて、階段の上から階下を覗き込むと、そこにはマーシェが何かを包んだ布を持ったトニアの母・タルオンの手を押し戻そうとしていたところだった。

「こうでもしなければ私たちの気がおさまりません！！　大切な罪の子に、うちのバカ息子が怪我をさせたとあつては！！」

その言葉に、レテアは「つみのこ？」とルルに聞いた。

ルルは哀しそうな瞳で、レテアに曖昧な笑みを浮かべただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3075j/>

罪の子ルル

2010年10月9日00時40分発行